



Title	古墳時代首長系譜の継続と断絶
Author(s)	都出, 比呂志
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1988, 22, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/48039">https://hdl.handle.net/11094/48039</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 古墳時代首長系譜の継続と断絶

都 出 比 呂 志

## 一 首長系譜の分析と政治史

古墳は、一基のみで単独に存在することは少ない。いくつもの古墳が群をなして古墳群を形成する。古墳群には群集墳と呼ぶ小規模な古墳の群集からなるものと、前方後円墳など首長層のために築かれた数基の大型の古墳が隣接してグループをなすものとの二つがある。後者は現在の行政単位の町や小さい市にグループ程度存在し、個々の古墳はそれぞれ一世代、ぐらいいの間隔をあげながら代をかさねて築かれる。この首長墓群の一単位を首長墓系譜と呼び、被葬者群に主体をおいて表現する時は「墓」を省いて首長系譜と呼称する。この首長系譜の出現と消滅を分析して古墳時代の地域単位の政治史を分析する研究は、すでに各地で実施され多くの成果を生み出した。

さて、日本各地における首長系譜の研究成果を通覧すると、系譜のありかたは一様ではない。古墳時代の前期・中期・後期の全時期にわたって一貫して系譜を維持しているもの、前期のみで断絶するもの、前期・中期までのもの、逆に後期になってから系譜が始まるものなど、そのありかたは多様である。また一つの首長系譜において、

ある時期に前方後円墳がとぎれ、これにかわって大きな円墳や帆立貝式古墳が築かれる場合がある。小野山節は五世紀において多くの地方首長が前方後円墳を築けなかった現象に注意し、伝応神陵古墳や伝仁徳陵古墳のような巨大墳の築造に示される河内王朝の権力による政治的規制によって前方後円墳の築造が中断させられたものと解釈した。さらに、このような規制が古墳時代において五回存在すること、それが大和政権の中枢にあった有力氏族の失脚と密接な関係をもつことを指摘して、古墳時代の政治史研究に重要な提言を行った。<sup>(1)</sup>小論の第一の目的は、この規制論の再検討を行うことにある。

首長系譜の分析を基礎に議論しうるもう一つの問題は、古墳時代の政治社会の成熟度合である。かつて西川宏は、五世紀の巨大墳である総社市の作山古墳や岡山市の造山古墳などの被葬者が吉備地方の多くの中小首長の上に君臨する大首長であることを明らかにしつつ、この「大首長は、単一の集団から世代を重ねて輩出したのではなく、複数の特定地域集団の首長がそうした地位をおそったわけであって、まさに吉備連合政権の確立を示す」と考えた。<sup>(2)</sup>

大首長が特定集団に固定されず、複数集団のなかで移動する現象にたいする考察をさらに前進させたのは吉田晶である。これを首長権が輪番的に移動する現象と解釈し、「輪番的に就任される大首長は部族同盟全体の結合的統一体としての権威と権力をもつ」と説明した。<sup>(3)</sup>つまり、このような政治権力のありかたは首長権の所在が一定していないことを示すとの見方になって、五世紀の日本が政治組織の形態において国家以前の「部族同盟」段階の特徴を示すとしたのである。

近藤義郎もまた吉田と似た観点にたつ。近藤は古墳の首長墓系譜の一単位を「部族」の一単位と把握し、作山古

墳や造山古墳などのような吉備の大首長墓は「部族」が連合した「部族連合」の「最高首長」の古墳と把握する。さらに京都府の丹後地域の場合を例示しながら、「この連合の最高首長の位置は、特定部族にかならずしも固定・世襲されていたわけではないようである。そのことは、最高首長を示す巨墳が、部族地域をこえて頻繁に移動している場合があることによっても示される」と結論する。吉田は「部族同盟」と呼び、近藤は「部族連合」と言う。この違いは、それぞれ confederacy of tribes<sup>(5)</sup>をどう訳すかの差と考えられるが、ともに古墳時代の首長系譜のこのありかたが国家成立以前の政治組織の特徴を示すものと解釈する点では共通している。すなわち、吉田は「部族・部族同盟」という民族的秩序を「破壊しなければ、古代専制国家」は成立しないという主張をもつ<sup>(6)</sup>。また近藤は「古代国家形成以前の諸部族内外の諸関係を律してきた古墳」という立場を表明している<sup>(7)</sup>。

古墳時代の政治組織を吉田や近藤のように理解しうるかどうかは、日本古代の国家形成の画期をめぐる論争にも大いに関係する。小論の目的の第二は、古墳時代を「部族同盟」段階と解釈しうるかどうかを、首長系譜論にしばって議論することである<sup>(8)</sup>。

## 二 京都府桂川右岸地域におけるケーススタディ

右に掲げた二つの問題を議論するうえで、個々の首長系譜を正確に把握することは不可欠な基礎作業である。とくに近年では開発事業にともなう大規模な調査が激増し、遺跡の分布調査で前方後円墳が新規に発見されたり、あるいは過去に墳丘が削平されて上部が消滅した古墳の周溝が新たに確認されることもある。開発の多い地方では、一つの市でも小さな前方後円墳が毎年のように発見され、時には当該地域の首長系譜の理解に変更を迫ってくる。

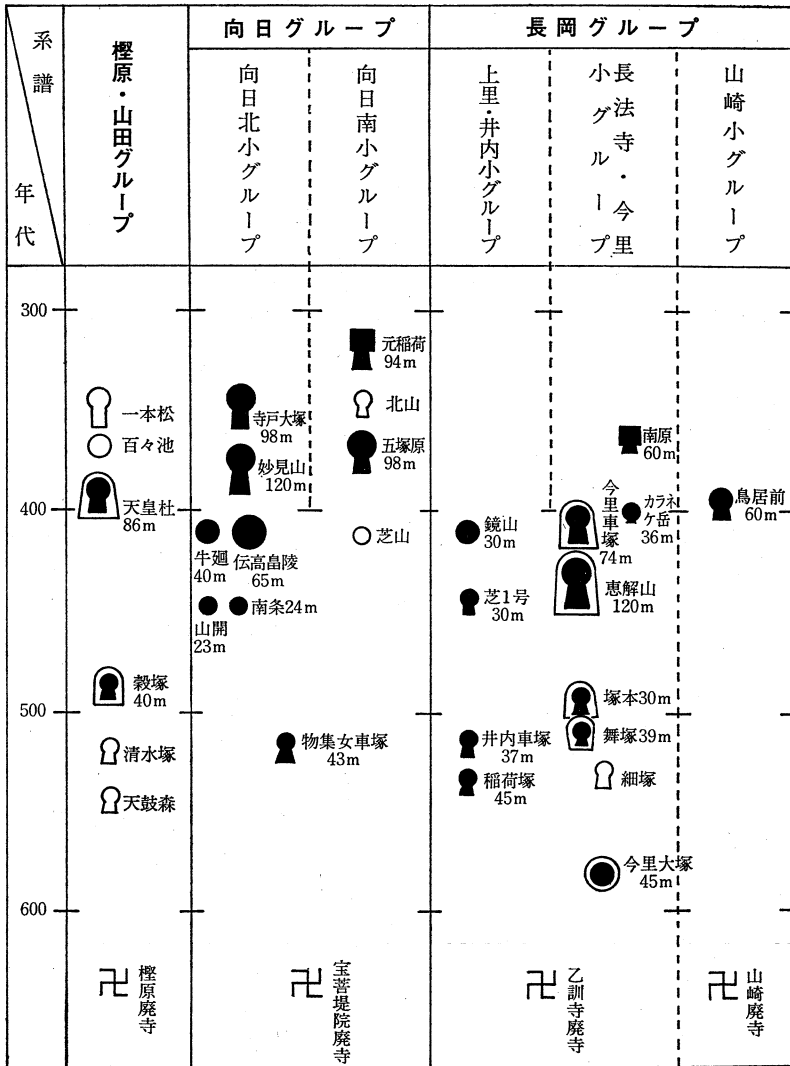


図1 桂川地域の首長系譜

したがって、この研究は、たえず地域に即した、きめ細かな調査活動を基礎としなければならない。

ここでは過去に調査が比較的よく行われ、かつ筆者が日々新たなとなる知見に触れる便宜に恵まれている京都府の桂川右岸地域のケーススタディを基礎とする。さらにここで把握した特徴が他地域でも妥当するか否かを、山城地域や近畿地方さらには全国の傾向と比較しつつ考察を進めることにしたい。

桂川右岸の地域とは、旧制の乙訓郡を中心として、さらに隣接する葛野郡南部の一部の地域を含む。葛野郡と乙訓郡は現在の国道九号線と桂川との交点付近で境をなすが、古墳時代にはこの境界域を拠点とする一つの首長系譜が存在しており、その領域は乙訓北部から葛野南端部にまたがっているから、ここで扱う桂川右岸の古墳時代の地域区分は律令郡制の区分と完全には一致しない。なお桂川左岸には顕著な首長系譜はなく混乱することはないので、以下の叙述では桂川地域とのみ表現する。

この地域における古墳時代の首長系譜は大別すると檜原グループ、向日グループ、長岡グループの三グループ、細別すると向日グループが二小群、長岡グループが三小群に分かれて全部で六小群となる。これらの系譜の分析についてはすでに述べたことがあるし、とくにこのうち向日グループについては詳しく叙述したので、<sup>(9)</sup>詳細はそれらに譲ることとし、小論の論述において必要で最小限の範囲にしぼって要説するとともに、この数年間で新たに発見された首長墓関係資料を紹介する。さらに、既知の古墳でも発掘の結果、年代や性格づけにおいて修正が必要となることがらにしぼって述べることにしたい。その成果を示すと図1のようになる。この図を解説する叙述の形式をとりつつ、右に細別した六グループのそれぞれの首長系譜について北から順をおって略述しよう。

## (一) 檜原・山田グループ

一本松古墳、百々池古墳、天皇ノ杜古墳、山田桜谷一号墳・同二号墳、穀塚古墳、清水山古墳、天鼓森古墳の順に築造されたものと考えられる。このうち山田桜谷の二古墳は京都市埋蔵文化財研究所の調査で新たに明らかになったものである。<sup>(10)</sup>出土の円筒埴輪は断続する横ハケメを有し、穴窯焼成であることから五世紀中葉と考えられ、天皇ノ杜古墳と穀塚古墳との間をうめる時期の古墳としてよい。この地域の北部の松尾地区の平野部の古墳群は学術調査をまずに早く消滅したものが多<sup>(11)</sup>い。元禄一一年の古文書には前方後円墳三基を含む八基の古墳が記録されている。今後の調査によって地下に遺存する周溝などから、これらの古墳群の正確な実態を究明しうるであろう。

## (二) 向日北小グループ

寺戸大塚古墳、妙見山古墳、伝高島陵古墳、牛廻古墳、南条古墳、物集女車塚古墳の順の築造が考えられる。このうち物集女車塚古墳は一九八三〜八四年の発掘によって後円部の横穴式石室と内部の石棺の構造や副葬品の構成が明らかとなり、六世紀中葉の古相に属することが判明した。<sup>(12)</sup>

## (三) 向日南小グループ

元稲荷古墳、北山古墳、五塚原古墳、芝山古墳の順が考えられる。古墳時代前期には向日グループは南北二つのグループに分かれるが中期以後については、あえて南グループの系譜として区別する必要があるような顕著な古墳が存在しない。したがって新しい段階では向日グループとして一括すべきであろう。

## (四) 上里・井内小グループ

鏡山古墳、芝一号墳、稲荷塚古墳、井内車塚古墳の順が考えられる。坂川流域を基盤とする。この系譜は前期に

顕著な首長墓をもたず、円筒埴輪や滑石製祭器の特徴から五世紀初頭のものと考えられる鏡山古墳から始まる。どの時期においても墳丘の規模が他の系譜の古墳よりも小さい点は注目される点である。

(五) 長法寺・今里小グループ

長法寺南原古墳、カラネケ岳二号古墳、今里車塚古墳、恵解山古墳、塚本古墳、舞塚古墳、長法寺七ツ塚四号墳、今里大塚古墳の順が推定される。小畑川右岸を基盤とする。この系譜の地域には細塚古墳が存在するが今は消滅した。その名から前方後円墳の可能性があるが、詳細は不明であり年代も判明しない。この系譜においては近年相次いで三つの古墳に関する新しい知見があった。その一は長岡京市開田の塚本古墳である。一九八四年に調査された。規模をメートルの数値で示すと、墳丘全長三〇、後円部径二〇、前方部幅二〇の規模をもち、幅二メートルの周溝をめぐらせる。楕形・蓋形・動物形・円筒形などの埴輪があり、その特徴から五世紀末ないし六世紀初頭と推定される。<sup>(13)</sup>

その二は長岡京市今里の舞塚古墳である。一九八二年に調査された。規模をメートルの数値で示すと墳丘全長三九、後円部径三〇、前方部幅一五の帆立貝式古墳となる。埴輪の特徴から六世紀前葉と考えられる。<sup>(14)</sup>

その三は長岡京市長法寺の七ツ塚四号墳である。一九八七年に調査された。円丘部の直径が一六メートル、高さ三メートルで、長さ四メートル以上の前方部をもつ。木棺直葬の埋葬施設が三基検出された。副葬品の構成から六世紀の後半と考えられる。<sup>(15)</sup>

(六) 山崎小グループ

大山崎町円明寺の鳥居前古墳は一九八六年と一九八八年の二回の調査の結果、円丘部直径四〇メートル、前方部

の長さ二〇メートル前後の前方後円墳であることが判明した。<sup>(16)</sup>立地が小泉川右岸にあり、右のグループとは出身基盤を異にする可能性がある。そこで長岡グループの他の系譜とは一応区別しておくが、五世紀初頭に突然出現して、その後継統する首長墓が現状では未確認である。

以上に述べた六つの首長墓の系譜は古墳群の所在場所と小河川の水系に即して区分したものであるが、中・後期には顕著な古墳群をもたない向日南小グループ、中期から群の形成を始める上里・井ノ内小グループ、鳥居前古墳以外に顕著な古墳が確認されていない山崎小グループなどは不安定な小系譜である。逆に檜原・山田グループの北群は後期になって前期とは離れた山田の地区に出現するから、南群と同一系譜としてよいかどうか検討が必要であり、厳密にはこれらは二つの小系譜に細分すべきと考えられる。このような点を考慮しつつ、桂川地域の系譜を大別する際には檜原・山田と向日と長岡の三つのグループに分けることとし、さらに細分した六系譜は小グループと呼ぶことにしたい。

### 三 古墳の墳形規制論の再検討

はじめにふれたように、小野山節は大王の古墳と地方の王の古墳の墳形や規模の変化を比較して大王権力の強い時期には地方の首長の古墳の墳形に規制を加えたと主張した。この問題を右の地域を一例として検証してみよう。

この地域では、向日グループの系譜は五世紀になると前方後円墳を築いていない。牛廻古墳や伝高島陵古墳は大型の円墳あるいは帆立貝式古墳である。山崎小グループの鳥居前古墳もまた前方部の短い前方後円墳である。したがってこれら二系譜のみをみると小野山の指摘は適合するかにみえる。

しかしながらこれに隣接する長岡グループにおいては、逆に五世紀になって前方後円墳の築造が顕著である。このうち今里車塚古墳は高橋美久二によれば伝日葉酢媛陵古墳の墳形と同一企画であり、かつ倭製の方格規矩四神鏡を有し、蓋形埴輪および円筒埴輪の特徴から五世紀前葉にしうる。さらに恵解山古墳は全長一・二〇メートルで、墳丘の範囲確認調査による墳丘裾部の調査結果を総合すると、伝仁徳陵古墳の四分の一の企画に復元できる。また、蓋形と円筒形の埴輪のうち円筒埴輪は外面の二次調整が断続するヨコハケメで黒斑を有する。この技法は穴窯焼成の埴輪よりも型式学的序列では先行する。<sup>(18)</sup>しかしながら黒斑の有る埴輪と無黒斑の埴輪の併存期間を短く評価し、無黒斑の穴窯焼成の埴輪の出現の暦年代を遅く見積る川西宏幸説は再検討が必要と考えるので、埴輪のみで五世紀中葉前後の古墳の暦年代を決めるのは一般に危険であるが、恵解山古墳においては前方部に多量の鉄器を収納した施設が検出され、<sup>(20)</sup>この鉄器の型式学的特徴をも勘案すると、五世紀の前葉と中葉の境におくことができよう。

右のように考えれば、今里車塚古墳と恵解山古墳とは小野山のいう河内王朝の規制の時期に属しながら前方後円墳の墳形をとるから規制の対象とはならなかったと考えねばならない。これにたいして同時期の向日グループや山崎小グループの系譜では円墳や帆立貝式古墳である。つまり隣接するこれら三つの系譜の相互の關係に注目すれば、長岡グループの前方後円墳は五世紀前葉と中葉において向日グループや山崎小グループよりも優位の關係にたっていることが判明する。

ここであらためて桂川地域の首長系譜どうしの横の關係を検討すると、古墳時代を通じて、たえずどれか一系譜の古墳の墳形や規模が優位にたっていることがわかる。前期の古い段階には元稻荷古墳が他の系譜にさきがけて古墳を築造する。ついで寺戸大塚古墳、五塚原古墳、妙見山古墳と続き、これと並行する時期には檜原・山田グル

ープに一本松古墳と百々池古墳とがある。一本松古墳の規模の詳細は不明であるが、これに続く百々池古墳は円墳であり、この系譜の優位性は認められない。また長岡グループに南原古墳があるが、近年の調査で全長六〇メートルの前方後方墳と判明した。したがって、四世紀代においては向日グループが桂川地域全体の盟主的存在といえる。

ところが五世紀の前葉と中葉とには逆に長岡グループが優位にたつことは右にみたとおりである。このあと五世紀の後葉における首長墓の実態が、桂川地域では十分にあきらかではない。このうち檜原・山田グループの穀塚古墳は全長四〇メートルの前方後円墳で竪穴式石室内に画文帯神獸鏡、帯金具、銀象嵌の環頭大刀、馬具などの遺物を有し、須恵器から五世紀後葉の新しい時代の年代が考えられる。したがって恵解山古墳と穀塚古墳との間に少くとも一世代分の空白がある。将来これを埋める資料が見つかるか、桂川地域では、もともと盟主的大規模古墳を欠く時期なのかは解明すべき重要な問題である。

つづく六世紀前葉においては大規模な古墳は確認されない。長岡グループの塚本古墳と舞塚古墳はこの時期に属するが、ともに小規模な前方後円墳か帆立貝式古墳である。一方檜原・山田グループにおける穀塚古墳の近隣の二つの前方後円墳（清水山古墳・天鼓ノ森古墳）は前方後円墳という以外に詳細は不明であるが、穀塚古墳との位置関係から、いずれかが六世紀前葉における桂川地域の盟主墳と考える余地もあろう。

ついで物集女車塚古墳が登場する。全長四五メートルの前方後円墳の後円部に横穴式石室を有し、家形石棺の内外に金銅製の冠をはじめ各種の装身具や馬具を納めて偉容を誇る。須恵器の編年によれば六世紀中葉の古相と考えられる。他の系譜では長岡グループの稲荷塚古墳や井内車塚古墳などがこの時期になると推定されるが、それ

らに比べて物集女車塚古墳は卓越した存在である。

さらに六世紀の後葉には長岡グループの今里大塚古墳が存在する。直径四五メートル、高さ五・五メートルの大規模円墳に周濠がとりまく。横穴式石室の玄室は長さ六メートル、幅二・五メートルあり、推定全長一六メートルの巨石墳であり、六世紀後葉の新しい時期のものと考えられる。

以上を総括すると、桂川地域のそれぞれの系譜のなかで優位に立つ盟主的首長は、この地域内の一つの系譜に固定していたのではなく、向日↓長岡↓榎原・山田↓向日↓長岡という順に移動していることが判明する。つまり向日と長岡の二つのグループは盟主的首長の座を二回にわたって交替しているわけである。

このことから導きうる一つの結論は墳丘の規制論に関する評価である。小野山は円墳などの墳形規制が中央の大王権力による直接的な規制と解釈したが、これとは異なる解釈が可能ではないか。すなわち五世紀の前葉・中葉において向日グループの系譜が前方後円墳を築きえないのは桂川地域内における首長間の序列の変化のためと考えられる。別の表現をすれば、長岡グループの系譜は畿内の大王権力の地方支配体制のなかで優位な地位を与えられた結果、それ以前の四世紀に優位にあった向日グループを支配秩序の中においてと評価できるのである。つまり地方の王の古墳が大王権力の直接的規制の結果として一律に前方後円墳を築けなかったのではなく、五世紀の大王権力が桂川地域を統轄するにあたり、長岡グループという盟主的首長を介して、その配下の数個の首長系譜を支配下においたと解釈できるのである。

ここまで論じると、はじめに述べた「部族同盟」論にも関わってくるので、節をあらためて他地方のありかたを含めて考察することしよう。

#### 四 首長権輪番制批判

吉田晶や近藤義郎は部族連合の最高首長の古墳が特定部族に固定されていない現象を重視する。筆者の右の表現にそって言い換えると「盟主的首長の古墳が特定の首長墓系譜に固定しない」ということになる。すでに例証としてあげられた吉備地方や丹後地方以外にも、このような現象は各地に認められる。

右に示した桂川地域もまた、その一例であるが、さらに目を淀川水系に広げてみよう。淀川水系上流域の木津川流域では古墳時代前期に、南から椿井、飯岡、大住、八幡、久世、宇治の五グループの首長系譜があるが、ここでは古墳時代前期では墳長一八〇メートルの前方後円墳に三二面以上の三角縁神獸鏡を出土した大塚山古墳が盟主的古墳といえる。ところが五世紀前葉・中葉ではこの系譜には顕著な首長墓はなく、盟主的位は久世グループに移動した。すなわち全長一五六メートルの前方後円墳に長持形石棺を納め、鉄製武器・武具を副葬した久津川車塚古墳と全長一二〇メートルの芭蕉塚古墳が相次いでこの地に築かれた。

また淀川右岸の三島地方では古墳時代前期には檜尾川、弁天山、安威の三系譜が存するが、このうち古墳の築造を最も早く開始し、かつ大規模な前方後円墳を有する弁天山グループが前期の盟主的首長の基盤と考えられる。これらは島上郡にある。しかしながら五世紀の中葉では島下郡の安威川流域における全長二二六メートルの伝継体陵古墳が盟主的首長の古墳となる。ところが六世紀前葉には再び島上郡の全長一九〇メートルの今城塚古墳が三島地方に君臨する。

さらに淀川左岸では、森、天野川、寝屋川の三系譜があり、前期においては森グループが最も早く古墳の築造を

開始して優位性を示すが、五世紀の前葉にはこの地域の北部に全長一〇八メートルの牧野車塚古墳が築かれ、盟主的古墳の基盤の移動が窺える。

これら、盟主的古墳を出すグループの移動の時期に注意すると、五世紀前葉、五世紀後葉、六世紀前葉に画期があることに気付くであろう。この時期はまた、全国各地において首長系譜の継続と断絶が顕著となる時期に相当する。たとえば甘粕健が指摘した武蔵の南北二地域間の盟主的古墳の盛衰などはその端的な場合である。<sup>(21)</sup>

このように考えるならば、吉備や丹後において近藤らが指摘する「最高首長の古墳」の移動は、それぞれの地域の自主的な動きではなく、全国的に連動した現象と理解しうるのである。つまり、吉田が「首長権の輪番制」と解釈したものは、決して地域内の自主的な動きではなく、全国的に連動する現象なのであり、名地の首長の地位を左右するような全国レベルの政変が背景に介在したとみるべきなのである。したがって、これを部族同盟段階の政治組織の特徴の証拠とされた首長権の輪番制と認めることはできない。

##### 五 結論——古墳時代政治史分析の視角

大王権力による地方首長の古墳への直接的規制説の批判と首長権輪番制説の批判とを総合して筆者の見解をまとめることにしよう。

盟主的古墳の系譜が移動する五世紀前葉、五世紀後葉、六世紀前葉の三つの時期は小野山が古墳の墳丘規制が認められるとした時期に近いことは注目すべきである。小野山が、大王権力によって多くの地方首長の古墳が規制を受けたと理解した点は、地方首長の前方後円墳がこの時期においても築かれていることから実情に合わないけれど

も、小野山がこれら三つの変動期が大王権力周辺における有力氏族の力関係の変動に起因すると示唆した点は、今後発展させるべき重要な提言と思われる。

大王権力の周辺におけるこの政治変動が、前節までに述べた各地の首長系譜の継続と断絶とに連動していると考えれば、さらに問題は大きく展開する。たとえば桂川地域において盟主的首長系譜は、四世紀代には向日グループにあり、五世紀前葉には長岡グループに移動する。前者の古墳の墳形の企画原理が奈良盆地東南部の箸墓古墳と緊密であることを和田晴吾は指摘した。<sup>(22)</sup> またこの系譜の元稻荷古墳の埴輪は箸墓古墳のそれと同様式である。これにたいし、後者の長岡グループの恵解山古墳の墳丘は伝徳陵古墳と同企画であり、かつ前方部の鉄器埋納施設が五世紀の大王権力に連なる古墳との共通点を多くもつ点は注目すべきであろう。

すなわち、五世紀前葉における向日グループから長岡グループへの盟主的首長権の移動は、五世紀前葉における大王権力周辺の政治的変化と連動していたのであり、この時期の大王権力が桂川水系に支配権を及ぼす上で、それまで奈良盆地東南部の政治勢力と結んでいた向日グループの首長を排除して長岡グループにテコ入れしたと理解しうるのである。このように考えることはまた、五世紀前葉における政治変動は地方のみならず中央においても激しいものであったことを物語る。五世紀において巨大古墳が河内平野に出現する現象を河内王朝の出現と理解する説を批判して、政治権力の中枢の所在は変わらず、墳墓地のみの移動と説く考えがある。しかしながら、この変動期が各地の首長系譜の断絶をともなっていることを重視すれば、中央と地方とを巻き込んだ大きな政治的激動がこの時期に生じたことは間違いない。さらに五世紀後葉と六世紀前葉においても、同様の現象を推定してよいと思われる。

古墳の首長墓系譜の継続と断絶とについて、このような視点から分析を加えることによって、古墳時代の政治史の分析に新しい展開を期待することができよう。

## 注

- (1) 小野山節「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』一六卷三号、一九七〇年。
- (2) 西川宏「古備政権の性格」考古学研究会編『日本考古学の諸問題——考古学研究会十周年記念論文集』(河出書房新社)一九六四年、一五九頁。
- (3) 吉田晶『日本古代国家成立史論——国造制を中心として』(東京大学出版会)一九七三年、一一四頁。
- (4) 近藤義郎『前方後円墳の時代』(岩波書店)一九八三年、二一七頁。
- (5) Morgan, L.H., *Ancient Society — Researches in the Lines of Human Progress from Savagery through Barbarism*, New York: Henry Holt and Company, 1877. pp. 120—130.
- (6) 吉田晶『日本古代国家成立論』(前掲)三六頁。
- (7) 近藤義郎『前方後円墳の時代』(前掲)三七七頁。
- (8) 都出比呂志『農耕社会成立過程の研究』(岩波書店、近刊予定)の第四章において、古墳時代の生産基盤や階級関係、あるいは物資流通機構などを分析したが、これらは部族同盟段階説の批判をも込めた筆者の基礎作業である。
- (9) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』二〇巻四号、一九七四年、三七—四〇頁。同「古墳時代」『向日市史』上巻、(向日市)一九八三年、一一七—一八六頁。
- (10) 京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選(二)』一九八六年。
- (11) 森浩一「元禄一年における京都市下山田の古墳調査」『古代学研究』六五号、一九七二年。
- (12) 秋山浩三・山中章編『物集女車塚』『向日市埋蔵文化財調査報告書』第二三集、一九八八年。
- (13) 木村泰彦「右京一七三次(七ANKHT——三地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和五九年度、一九八五年、三四—四〇頁。

- (14) 山口博・伊辻忠司・肥後弘幸「長岡京跡右京第八三・一〇五次」『京都府遺跡調査概報』第九冊、京都府埋蔵文化財調査研究センター、一九八四年、九七―一二二頁。
- (15) 長岡京市教育委員会・長岡京市埋蔵文化財センター『七ツ塚古墳群第三次調査現地説明会資料』一九八七年。
- (16) 福永伸哉編『鳥居前古墳』(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第六集、一九八七年)。なお一九八八年に大阪大学文学部考古学研究室が実施した調査の結果、後円部基底部と同じ高さの前方部葺石列の下にさらに、もう一列の葺石列を検出した。この結果、前方部の長さは後円部直径の半分の前方後円墳と判明した。
- (17) 高橋美久二ら「長岡京跡右京第二六次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』一九八〇―二二 京都府教育委員会、一九八〇年、九九―一二二頁。
- (18) 川西宏幸「円筒埴輪論」『考古学雑誌』六四卷二号、一九七八年。
- (19) 都出比呂志「前期古墳の新古と年代論」『考古学雑誌』六七卷四号、一九八二年。
- (20) 山本輝雄ら「恵解山古墳第三次発掘調査概要」『長岡京市文化財調査報告書』第八冊、一九八一年。
- (21) 甘粕健「武蔵国造の反乱」杉原荘介・竹内理三編『古代の日本』第七卷、角川書店、一九八〇年。
- (22) 和田晴吾「五塚原古墳の墳丘測量より」小野山節編『王陵の比較研究』京都大学文学部考古学研究室、一九八〇年、五八―六〇頁。

(文学部教授)

小論を、一九八九年三月に九州大学文学部を定年退官される横山浩一先生に献呈する。